
The last act **終わりの奏でる幻想戯曲**

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The last act 終わりの奏でる幻想戯曲

【Nコード】

N3389Y

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

『真実』を知るまで終わらない。俺の召喚された世界は、想像を覆す世界だった。史上最低の世界とも呼べる世界。しかし、その世界にも終わりが近付きつつあった。どれだけ最低最悪でも終わりにさせて溜まるかよ。秩序も物理法則も何も無い世界、告げられるタイムリミット。世界の終わりは刻一刻と迫る。終わらせない、世界が終わってしまうその前に、俺は自分の正義、勇氣、想いを胸に、俺の信ずる道を進む。俺に出来る、いや、この世界に出来る最期で最大の足掻きを今……。安心と安全の主人公最強厨二物語（

残酷な描写、表現、卑猥な表現、描写が登場します。苦手な方は即座にバックブライザー（文章が稚拙な為、暇潰しにでも読んで貰えればこれ幸いです）

第零小節 変わらない日常

「ようこそ、篠宮稜斗君。まずはこの状況、理解出来るかな？」

金色の、長い、それこそ腰位までありそうな長い髪を持つ、同じく金色の瞳をした、確実に美少女にカテゴライズされるであろう少女が俺の目の前に居た。

「……は？」

理解出来る訳が無く、俺は間の抜けた声を上げる。

「はは、それはそうだよな。ま、順を追って説明するよ」

「あ、嗚呼……」

変わらない日常。

学校に行つて、友達と騒いで、授業熟睡して怒られて、帰り道に寄り道したりして。

家に帰れば、テレビ見て、新聞読んで見たりして、買ったばかりのゲームをして、PCを繋げて、メールが届いていたから返信して寝て。

バイクの免許取って見たりして、車まで後少しって頑張ってみたりして。

そんな日常。

誰が好き好んで、自らそんな平穏な日常をぶち壊すかよ。
平穏で平凡な日常が好きだったのに。

好きだったのに。

なあ、神様。

聞いて見ても良いかい？

俺を何処まで叩き落せば気が済むんだ？

第一小節　そもそも始まり（前書き）

今回、曲なので小節で参ります。
では、どうぞ！

第一小節　そもそも始まり

そもそも、どうしてこうなったのか。

俺は何時も通り、友人達と別れ、夜食を買ってから帰路に着いていた。

既に日は落ちていたが、特に遅い帰宅でも無かった。

部活に入っていれば当たり前前の時間だし、まあ俺の場合は部活では無く友人達と遊び呆けてこんな時間に成ってしまったのだが、これでも親は何も言わない。

それはそうだろう。親は俺が幼い頃に、流行り病で既に他界しているのだから。

親が居ない生活にも慣れたので、特に困る事は無いが、心配してくれる人が居ないと言うのは若干寂寥感に駆られる。

不意に、頭上でブーンと音がし、周囲で光が明滅した。

見上げると、街灯が点滅している。故障か、或いは電球の交換時期か、辺りを照らす光は酷く頼り無い。

ふう、と息を漏らしてまた歩き始めた。

今日は空気が澄んでいる。

空が綺麗だ……、嗚呼、今宵は満月か。

相も変わらず、月は綺麗だよな。

いつ何時でも空から人々を照らし続ける月。俺は月は好きだ、太陽より好きだ。

確かにお天道様も嫌いではない。特に今の季節、お天道様の暖かい光は本当に助かる。しかし、俺の好き嫌いの意味はそう言う意味

ではない。

月自体が綺麗なのだ。

見ているだけで魅了されそうなの、まるで瞳の様な、そんな妖艶さも持つあの月が。

て、何俺は語っているんだか……。

「明日は休みだし……、今日はゆっくり寝よう」

天を仰ぎ、空を掴む様にして、腕を上に掲げ、体を伸ばす。背骨が伸びている感覚が手に取る様に解る。

瞬間、周囲の街灯が一斉に弾けた。

「 ツツ!？」

連続で割れる街灯。

響き渡る破壊音。

降り注ぐ硝子の破片の雨を、後退して避ければ、俺は一人呟いた。「事故、なのか……。それとも……?」

灯かりの無い漆黒の道で、俺は顎に手を当てて、思索した。

これが事故、故障による影響ならば致し方ない。だが、もしも狙って誰かがやったのなら、夕子の悪い悪戯過ぎる。

むしろ、公共物破壊で捕まる。

「……、取り敢えず、帰ろう」

俺は顎から手を離して、再び歩み始める。

灯かりの無い、この漆黒の道は、恐怖の道。

街灯が合っても怖いのに、街灯が無くなれば怖さ倍増である。

と。

ズツ………!!

「……へ？」

何も解らない。

何も見得ない。

唯、背中が熱い。

痛い。

「……」

俺は熱い場所に触れ、付着する液体に、ゾクツとした。

その液体は生暖かく、妙に粘膜質。

そして、俺はその場に膝からまず崩れ落ちる。

全身から何かが抜けて行くこの感覚。

何か、抜けて行つては成らない物が、おひただ夥しく零れ、抜け、溢れて
出て行く。

遠のく意識。

霞む視界。

手で体を支える事も辛くなれば、そのまま身を道路に投げ出し、
這いずって、壁まで寄る。

壁に背を預ければ、そのまま完全に沈黙し、俺は天を仰いだ。

「……嗚呼、何で、……」

言葉を発する事も俛成らない。

激痛よりも、痛覚すら遠のく。

俺は震える手を持ち上げ、月へと伸ばせば、そのまま投げ出し、まるで最期と言つ様に紡いだ。

「嗚呼……、月が……、綺麗だ」

第二小節　これで終わり、そして始まり（前書き）

さてさて、終わって始まりますね。

これにて序曲は終わり。

次から第一節ですね。

では、どうぞ！

第二小節 これで終わり、そして始まり

で、今に至る。

詰る所、俺は今、三途の川前に居るらしい。

無神論者、無宗教論者の俺にとって、三途の川の有無は結構響いた。

今まで無いと思っていたからな……、三途の川とか天国とか。

俺が、これからは少しは信じてみようと思っていると、俺と対面する様にして座っている先程の金色の髪を持つ美少女が首を傾げて尋ねて来る。

「君、名前は？」

「俺……？俺は篠宮稜斗」

「稜斗君か。此処までの事、理解して、信じて貰えた？」

「ま、まあ……。現に俺はこうなっている訳ですし……」

肯定する様に頷いて見せる俺に、彼女は無邪気な笑顔を見せて「なら良かった」と続ける。

「それでね、君に一つ、頼みがあるんだ」

「頼み？」

首を傾げる俺に、彼女は頷いて「これからとある世界に行つて、世界を改変して欲しい」と、真面目な顔で告げて来た。

「世界を、改変……？」

何故そんな事を？ そう首を傾げれば、彼女は肩を竦めて「皆が皆、地球みたいに立派じゃないって事だよ」と続けてから「その世界はね、レジエンディアって言う世界。奴隷制度とか、民主人種貧困差別、紛争、内戦、戦争が未だに続いている世界」と俺の瞳を見詰めて、至極真面目に言つて来る。

「いや……、てか何でそんな危険極まり無い事を俺が？」

そもそも其処だよ、俺以外にも人材は居るだろう。

「君だからだよ」

「理由になつてねえぞ……」

額に手を当てて溜め息を吐く俺に、彼女は「冗談冗談。でもね、君だからって言うのは本当。君なら遣つてくれそんな気がする。だつて君、助けを求める人を放つては置けないタイプでしょ？」と首を傾げて尋ねて来る。

「まあ……、嗚呼、助けを求めているのなら助ける主義だな」

「でしょ？ そう言うのをこの世界じゃあ一般的に？ 主人公？ つて言うのさ」

「主人公……」

ゾクッ。

背筋に走る、電流の如き流れ。

主人公と言う言葉が脳内に響き渡り、ドーパミンを出し始める。

「ねえ、そろそろ脇役から主人公に成ってみようよ。私も協力するよ？」

「……」

魅力的な誘いだ。

物凄く頷きたい。

だが、俺で良いのか？

「それに、君は主人公に成るべき存在なんだよ」

再び走る、流れ。

跳ねる鼓動。

だが、俺に出来るのか？

「勿論、相応の能力も授けるし、情報は君に必ず発信するよ?」

参った……。

「それに」

これじゃあ……。

「あの世界は今、助けを求めている」

断れないじゃないか。

「解った……、遣ろうじゃないか。遣ってやるさ、どうせもう一度死んだ人間だ。一度位、違う世界で格好付けたって何も言われないよな」

格好付けない奴が一番格好悪いつてな。

遣って遣ろうじゃないか、二度目の人生だ。派手に暴れてやる。

「ホント?! じゃあじゃあ、契約ね?」

「契約?」

書類でも書くのか?

それとも握手。

「……えいつ」

「 ツツ!?!? 」

……これ?

「 …… 契約完了、寄りにも寄って、君にファーストキス、上げちゃった 」

「 ……、これで、契約、なの、か? 」

重なったばかりで、まだ暖かい、温もりの残っている己の唇を抑えてから、途切れ途切れに尋ねる。

「 そうだよ? これで終わり。それじゃあ次に能力、と…… 」

「 ふむ……、能力ね 」

あー……、顔が熱い。

不意打ちは卑怯だろうよ……。

「 君には……、これかな? 」

「 どれどれ? 」

頭を掻き乱し、振り乱し、振り払い、冷静に戻れば、首を傾げる。

「 ? 創帝神造? 」
ペリエアクリエイティ

「 わ、厨二臭っ…… 」

「 黙ってなさい。それ言ったら私達まで厨二みたいでしょ 」

「嗚呼、そりゃあそうか……」

これは悪い事をしたな……。こんな厨二の集まり場所で厨二は禁句だったな。

「能力説明は、君の望んだ武器、能力、業、力、全て具現化、使用可能。但し、変化は出来ないかもね。まあ、変化以外は全て出来るよ」

「チートかつ!!!」

完全チート能力じゃねえか?! これ!?

良いのか!? 俺。これで良いのか?!

「嗚呼、他の能力でも良いけど、君あの世界じゃあまず一番最初に殺されるよ?」

「喜んでこれにさせて戴きます」

笑顔で返答すれば、彼女は満足そうに頷いて「それじゃあ行くところか?」と言って、立ち上がる。

「でも、どう行けば良いんだ?」

「簡単簡単」

「簡単?」

扉とか? トンネルとかかね?

第二小節 これで終わり、そして始まり（後書き）

稜斗君、純情

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3389y/>

The last act 終わりの奏でる幻想戯曲

2011年11月8日04時13分発行